

実施内容報告書

課題名「初期の映像装置“ミュートスコープ”を再生してみよう！（交付番号：24007）

機関名：おもちゃ映画ミュージアム

氏名：太田文代

当館には、開館前の 2012~3 年頃にイーベイで購入した大きなミュートスコープのリールがありました（下掲写真）。約 850 枚から成る連続した写真が円形に組まれています。



何が写っているのか分からず、ずっと見てみたいと思っていました。そんな折に出会ったのが映像玩具の科学研究会を主宰されている橋本典久さんでした。初期映像装置に関心を持ち、実物借用や文献を調べて研究し、これまでいくつもの装置のレプリカを制作されました。装置の面白さは展示ケースの中では分からないので、当館では小さな子どもさんにも触って体験してもらえるようにしています。そうした姿勢にも共感されたのでしょう、リールを見るための本体制作を二つ返事で引き受けて下さいました。

今年はメディアアーティストで人気絵本シリーズ「100 かいだてのいえ」作者の岩井俊雄さんが東京都写真美術館と共催で 7 月 30 日~11 月 3 日に「光と動きの 100 かいだてのいえ—19 世紀の映像装置とメディア—」を開催され、親交がある橋本さんもその手伝いで大忙しでした。その合間をぬって、ミュートスコープ再生の宿題にも取り組んで下さいました。この初期映像装置の展覧会は大入りで、私どもの活動とも重なることから、会場でチラシ配架にもご協力いただきました。この展覧会を通じ、大勢の人々が、初期映像装置に関心を持って下さる機会になったことを嬉しく思います。

制作に着手した橋本さんでしたが、ネットで検索した他のリールと比べると、組まれた写真の向きが天地逆で、特殊なものだと判明し、頭を抱えられました。メディア考古学第一人者の UCLA のエルキ・フータモ教授から「自分も見ることがないが、最近出版された『MUTOSCOPE:A tale of two companies Volume 2 larry Beeza』に載っていたかもしれない」とのヒントを得ます。米国から取り寄せたその本の中に同じリールを用いた装置が載っていて、橋本さんの探求心は次の段階に向かいます。そのリールは“セレクトターミュートスコープ”用のものだと判明したのです。

セレクトターミュートスコープは、一時期世界で最も普及していた映像再生装置で、アーケードセンターやゲームセンターなどに置かれ、組み込まれた 5 本のリールの中から 1 本を選択し、コインを入れると明かりがつ

いて、覗き窓から自分一人だけがその映像を覗いて楽しめるというものでした。けれども劇場映画の攻勢であまり売れなくなって、世の中から消えることになってしまいました。



「このリールの内容が見たい」という要望から始まったことなので、本体は汎用性がないけれども手持ちのリール仕様に制作して貰いました。



それが、これです。「初期の映像装置“ミュートスコープ”を再生してみよう！」Part1として9月21日に初披露しました。下掲は9月21日開催したPart1のチラシです。

ミュートスコープリールを再生する！
2024年9月21日(土) 14:00~16:00
 初期の映像装置“ミュートスコープ”を再生してみよう PART 1

2024年度学生科学博物館特別公開特別企画

橋本典久氏
 「ミュートスコープのリールをどうにか再生する装置を作れないだろうか？」と相談を受けたのが2023年4月。リールが届いたのがその翌日。さあどうしたものかと考えること1年少々。どうにか再生装置を完成させて、9月にお披露目することになりました。各種レプリカ制作の裏話も紹介します。さらに東京工芸大学の馬場先生にお越しいただき、スマートフォンを使った簡易装置フィルムビューワの研究紹介もいたします。(抜本)

馬場一孝氏
 映像制作変遷と装置開発を軸にした多様な映写フィルムシステム

参加費(入館料込)
 高校生~大人1000円
 中学生500円、小学生以下無料
 定員25名 予約優先

一般社団法人 東京科学博物館 東京科学博物館
 おもちゃの博物館 2F 2F
TOYFILM MUSEUM
<https://toyfilm-museum.jp>
 〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
 TEL: 03-5561-0100 FAX: 03-5561-0101



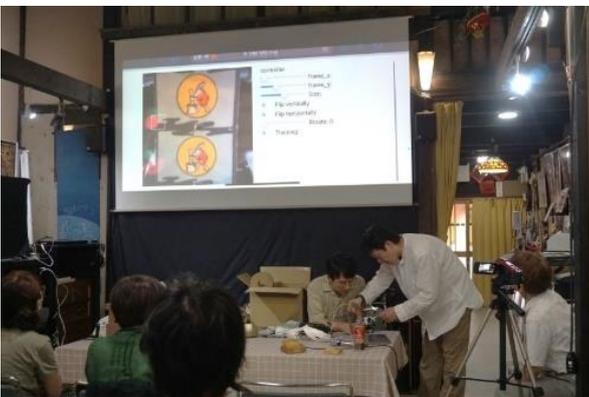
橋本さんの制作過程などの研究発表の後、本体正面に当館のシンボルマークを貼り付けている筆者です。参加者の皆さんの拍手の中、“橋本式”ミュートスコープ本体が完成し、早速、見たかったリールをセットしてもらい、役得で一番先に覗かせて貰いました。

ハンドルを回すと、パタパタ心地よい音がして 850 枚から成る巨大パラパラ漫画の中身を漸く知ることができました。橋本さんが調査された結果、作品タイトルは『The Next War』。当日も参加して、実際にご覧になった軍事に詳しい友人によれば、第一次世界大戦頃の戦艦と戦車が写っているそうです。

当日は、馬場一幸東京工芸大学助教のスマートフォンによるフィルムスキャンの紹介もありました。当館にふさわしい研究ということで橋本さんからの提案でした。



チラシにも載っていますが、この時点では、まだパソコンに繋いでいますが、Part2 の 12 月 1 日にはスマホだけに進化していました。



写真は Part1 で、当館所蔵の紙フィルムを用いての実験の様子です。この段階では、橋本さんが担当するフィルムを安全に送るための装置は未完成です。橋本さんの読み通り、フィルムに関心を持つ人がこの後、馬場さんを囲んで意見交換。今後の展開への期待が高まります。

その後、皆さんで完成したばかりのミュートスコープを体験。一人一人が手回しのハンドルを回して、覗き窓から『The Next War』を見ました。



当館が12月28日で一旦閉館し、来年4月西陣で再出発すると知った橋本さんの提案で、現在の様子を動態記録保存しようということになりました。監督が橋本さんと、馬場さんがスマホで短い動画を撮影。



参加者の皆さんは展示をご覧になる見学者になり、私どももカメラを招き入れる役で登場しました。橋本さんが簡単な粗筋説明の後、一発撮影。最後の場面は、みんなが手を振りながら2階を見上げる様子を撮影。各イベント後に毎回撮っている記念写真と同じです。上掲写真は2階から階下の参加者の皆さんを撮影する馬場さん。早速スクリーンに投影して、拍手の中、みんなで観ました。

当日の様子はこちらで書きました。<https://toyfilm-museum.jp/blog/column/25847.html>

その1週間後の9月28日10時、松井孝治京都市長が見学に来て下さいました。館内を案内していて、完成したばかりのミュートスコープに目を止められて実際にハンドルを回してご覧になりました。その時の動画を、自らXでその日のうちにUPされました。<https://x.com/matsuikoji/status/1839958499528454486>。「これは良いですね。いつでもここで体験できますか？」と尋ねられ「12月に発表する体験版制作のために一旦返しますが、12月には展示用と体験版の二つが揃います」と答えました。その日の会話で実は新市長さんは映画がお好きなのだと分かりました。力を得て、産官学連携した映画博物館を作って欲しいと具体的な案を提示して京都市の協力を仰ぎたいとお願いしました。後日、同行された方に尋ねたところ、「市長さんは、その必要性を十分に理解されている」とのことで、閉じていた扉の向こうが少し見えたような気がしました。来館いただいたことを、ブログ<https://toyfilm-museum.jp/blog/column/25517.html>で書きましたら、大きな反響がありました。

また、東京工芸大学で9月20日~10月10日に日本アニメーション協会名誉会長の古川タク先生がイラストレーション集『TAKUPEDIA』で第53回日本漫画家協会賞大賞を受賞されたのを記念して「—Taku Furukawa タクペディア展—」が開催され、10月5日のトークイベントで橋本さんが“驚き盤”をテーマに研究発表。続く古川先生と対談の間合いに、多くの時間を割いて、当館でのPart2の紹介を詳しくしてくださいました。トーク最後に古川先生が「いやー、凄い人が現れた」と橋本さんのことをおっしゃったのが印象的。

マニアックな初期映像装置を体験してみよう!
2024年12月1日(日) 14:00~16:00
初期の映像装置“ミュートスコープ”を再生してみよう PART 2

9日におもちゃ映画ミュージアムで撮影したミュートスコープのフィルムを披露します。合わせてアンノスコープなど様々な見方と見どころのない不思議でマニアックな映像制作も紹介、馬場先生との研究成果(簡易映画フィルムビューワー)の完成度も発表します!

「驚き盤」と呼ばれるミュートスコープフィルムが持つ巨大なフィルムが1836年誕生した「ミュートスコープ」が、ドキュメンタリーの撮影や教育で使われていた。その名は「驚き盤」であり、当時の技術者や研究者の間では「驚き盤」と呼ばれていた。このフィルムは、当時の技術者や研究者の間では「驚き盤」と呼ばれていた。このフィルムは、当時の技術者や研究者の間では「驚き盤」と呼ばれていた。

橋本 久志
 玩具博物館のミュージアム・アーティスト。玩具博物館のミュージアム・アーティスト。玩具博物館のミュージアム・アーティスト。

橋本 久志
 玩具博物館のミュージアム・アーティスト。玩具博物館のミュージアム・アーティスト。玩具博物館のミュージアム・アーティスト。

定員25名
 予約優先

参加費(入館料込)
 高校生~大人 1000円
 中学生 500円 小学生以下無料

お問合せ
 2024年4月以降
 オンライン予約
 受付中。

一社団法人 玩具博物館 東京都
 若葉区豊島 1-1-1
TOYFILM MUSEUM
<https://toyfilm-museum.jp>
 TEL: 03-5622-4009 FAX: 03-5622-4000
 E-MAIL: toyfilm@toyfilm-museum.jp

そして迎えた Part2 の 12月1日。この日は映画の日で、初期映像装置やスマホを使ってフィルムスキャンする研究の成果を発表するには最適の日だと思って選びました。

終盤一生懸命宣伝したことが功を奏したのか、遠方からも来て下さり、満員の盛況でした。この日は私どもの活動に関心を持って下さったアメリカのドキュメンタリー映画監督アンナ・ウェルトナーさんが11月25日から撮影をしている『Toy Film Story(仮題)』の撮影日。ということで、アメリカ式に各人に撮影同意書を書いて貰いました。当日の様子は超長文になりましたが、後に光学玩具や初期映像装置に関して参考にして頂けるだろうと思って書きました。橋本さんにも馬場さんにも点検して貰いましたし、何よりこの振り返りを書くことによって私自身が大変勉強になりました。



新しく作って貰ったリール。これによってミュージアムが移転した後も、懐かしく思い出することができます。



最初にこちらも役得で、館長がどんなふうに見えるか体験。



オリジナルは 850 枚でしたが、紙の厚さの問題や丸くびっしり詰めて形を整えるのが難しく、約 700 枚に減らして組上げ。その動画も載せていますので、ぜひご覧いただきたいです。

<https://toyfilm-museum.jp/blog/column/26007.html>



橋本さんがこれまで実物を借用するとか、文献に当たって研究された上で再生された初期映像装置がたくさん並び、それらについて説明を受けながら、実際に触れて体験できた貴重な機会でした。19 世紀に、このような様々な工夫を凝らした映像装置が考え出されたのだと知り、「当時の人々がこんな風に見ていたのだ」と想像の翼を広げた楽しい時間でした。



それから 22 日経った 23 日 9 時に、大阪芸術大学教授の福本隆司先生が、専門の技術者を招いて、今現在、日本では 5 台しかないという超高価で最新の中国のメーカー XGRIDS の高性能ハンディ 3D スキャナーを用いて館の内外を撮影して高精細な 3D データで保存して下さいました。



手に持って歩くだけで瞬時にして高精度にデジタル化して見せてくれる技術は、「凄い！」としか言いようがないぐらいのものでした。撮影して頂いた映像は当館が移転後に予定している 4 月 3 日内覧会で初披露しようと福本教授と話をしています。

19 世紀のアナログな動態保存方法と 21 世紀の高精度な 3D デジタル動態保存の対比が面白かったです。橋本さんが講演で「最近では 3D の技術で残す試みがなされるが、冷たい感じがする。今回のミュートスコープは、もっと生っぽい、人の気持ち、血の通ったアーカイブになったと思う。電気もパソコンも不要で、ハンドルを廻せばいつでも見ることができるなど、結構良い面があると思った。テクノロジーが新しくなると、全てが上手くいくなるのではなく、いろんな技術が削ぎ落されていく。その中に、実は大切なものがあったりする。そんなことに改めて気付いた」と制作しての感想を述べられたのが強く印象に残っていたので、福本教授にも投げかけてみましたが、「その通りです。どっちが良いかではなくて、どっちも良いのです。橋本さんに会ってみたいなあ」と仰って下さいました。わたしも「どっちもあるから豊かなのだ」と思います。

最後に当館恒例の記念写真を撮りました。



紙幅の関係から馬場さんの発表には触れられませんでした。ブログで書いています。参加して下さった皆様、講師の橋本さんと馬場さん、そしてアンナさんはじめ撮影スタッフの皆さんに心より御礼を申し上げます。

本当は、子どもさんたちも参加して簡易なゾートロープなどを作るワークショップも催したかったのですが、予算の関係もあり諦めました。ともあれ、実に充実した面白い催しをすることができました。そして、こうした場を持つことができた一般財団法人全国科学博物館振興財団様のご支援に厚く御礼を申し上げて報告とさせていただきます。ありがとうございました!!